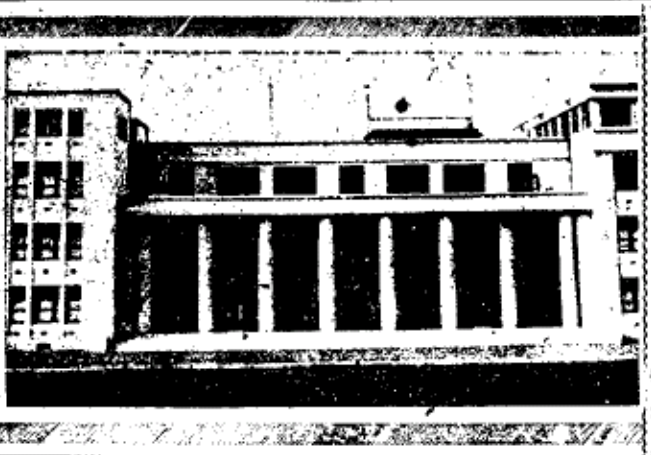
慶應義塾醫學部新聞
開校記念日
慶大醫學部新聞部
新宿區信濃町35
発行人　本間良輔
編輯人　小林文雄
月刊毎月十日発行

日吉返還遂に成る!!

喜びに湧く學園

日吉返還は、塾をあげての關心事であつたが、遂に四年に渡る努力が報いられ日吉の丘が再びペンの金文字に溢るる日が決定した。本年一月司令部を訪問し懇談して以來、漸く問題は活潑化し、五月に至つて前途極めて有望の報が傳へられて關係者は勇み立ち遂に六月三十日付の内示を受取るに至つた。朗報はいち早く日吉にも傳へられ學園は日吉のいきづきが早くも始つてゐる。



告示

教職員諸生並びに塾員諸君

われらの待望久しい日吉校舎は聯合軍最高司令官より本塾司令部に対し本日解除され来る十月一日から使用を許可された。

本塾は此の日吉校舎返還の日に塾員・教職員・塾生一丸となり総掌教職員の復帰をはかる一方日吉校舎返還の日を以て塾籍復帰の完成する日と目して来た。

如何なる難事に際会するも一致と努力とは遂に希望を達成する所以である。

今この朗報に接し得た悦びを胸ち諸君の協力に対し深甚な謝意を表すると同時に今後の使命の愈々重大なるに鑑み過去四箇の貴重な体験を他日の教訓たらしめんと期するものである。

昭和二十四年六月三十日

塾長　瀬田江文

只うれしいのみ

永澤理事談

只嬉しい、私の感想はこの一語に尽きる。塾生としては之で今迄期待の通であつて校舎不足を一挙解決し、之からは復興と云ふよりもむしろ塾の復興の段階に入るべきであると思ふ。

校舎を何に使ふかは未だ決定して居ないけれ共、現在校舎のない高等学校を終戦又は塾部の一部を之に當てる事は塾の新小学校の設置を強調する有効に使用するために三田、四谷、三鷹、日吉を引きくるめ塾の至實教育の根本計畫を樹立すべく努力中である。

接收より還還迄

日吉との四年に渡る訣別は昭和二十年九月二日、南よりの第二波のジープに始るが之は枢密顧問官を務めるお偉い方、四日に夫々少數の士官、兵によつて寄別舎が接收され

醫化學教授決選投票近し

長らく空席であつた醫化學教授の真任教授は近くその決定を見る運びに至つたが、現在の所三名の候補者が詮衡委員會に上つゐるとか、うち安

五日には遂に二十四時間以内熟心に行はれたのであつたが明瞭しの正式接收書を提示された。かくて第一、第二接舎は第二波に対し接收された。

この間塾としては強硬交渉を通じ敷度に及んで交渉を試みたが、ともかく反撃再開が解を得て二十日には五八能兵大隊の引上げを見るに至つた。

翌日午後、ハル少將下の一軍團によつて再接收の憂目を浴びて、遂に其後は今日に至る迄日吉はイレブス・ファースに依つて接收されてしまつた。塾は最後まで、事務授業再開を願ひ、入方奔走し先輩知己有力者によつて積極

增築計畫具體化さる

先づ隔離並に結核病棟を

全國に名を馳せる慶應醫學部病院も今まで結核病棟及び隔離病棟なく、その名にふさはしい内容にかけ、インターン・プラクチカントの育成もその場を外に求めなければならない現狀であつたが、今度各方面よりの絶大な援助に

部病院も今まで結核病棟及び隔離病棟なく、その名にふさはしい内容にかけ、インターン・プラクチカントの育成もその場を外に求めなければならない現狀であつたが、今度各方面よりの絶大な援助に

よりようやくにして實行運に之設計を進ずるはこびとなり今年中にその一部を完成する目算が出来た。

その内容については未だ詳細に到らず又獲算の面に於てなほ多く外に期待しなければならないため暫々とした感觸

客員教授制新設か？

今度、慶應義塾に於て、客員教授制度が新設されるとの噂が流れ、その人選に於ては常任教授の中から選出するとの説と、塾外の人士を招聘するとの説とがあり、いづれにしても、現在慶應の教授陣に新しく設定される気鋭が見られるに過ぎず、現在慶應の中である

りの新學期にそなえたが、之は時業醫學部が此處に再建しようと云ふ雲行であつた。五月

醫學とヒューマニズム

時評

醫學とヒューマニズムなどと此の間題を問題さほつて取上げる事ではないが醫學の實踐はヒューマニスチックでなければならぬとはよく言はれる言葉であるが、一體此はどんな意味であらふか。人間を動物と同じ様に取扱つてはならぬ、機械的に處置しないで人間味を生かせと言ふ丈の事だらふか。現代醫學が科學的目然主義の上に立つ限り醫學も又近代科學の範疇を越へる

ものではない。ヒューマニズムが言ふが如く近代科學がルネッサンス以來人間性からの開放を目指して進んで來つたものであるならばその一分科たる醫學の中に本來人間否定的なものを含んで居るのに何らの不思議もない。醫學が科學である限り醫學者はあくまでも事物を客觀的に冷靜に正しく追求しなければならぬ。科學的精神は本來非情のものである事を知らねばならぬ。問題は醫學の實驗に常つてその働く場が生命を有する有情の人間であり又社會である處に生ずる。ヒューマニスチックであるとは事は此の本來非情の科學的精神をもつてして生命ある有情の人間を追求せんとする時必然生ずる種々の矛盾を調整する爲の方

法を考へねばならぬ。人間の生命ある人間の生命を追求する醫學者と社會科學の實踐者とが共に手を携へて進むべきである。最も合理的な理想社會の實現の爲に最も不合理な暴力革命を科學的なるが故に暴動化しなければならぬ處にヒューマニズムの矛盾がある。こうした矛盾が今日混迷のまゝ過ぎ去られて居る時代はなく、平和の爲に戦爭が必要であり交通を妨げる爲に電車を停める必要がありその他色々の人間社會では合理が不合理を要求する場をあまりにも屢々我々は見せつけられて居る現代なのである。その意味で大きく言へば現代はそうした問題の解決を人類が身をもつて行はねばならない過渡期にあるとも言つてもよいであらう。

そうして整地が確定され、手術機物に注加し、改造後は凡そ百ベットを目標としてゐる。隔離病棟は南北に長く外廊に

は深れないが結核病棟は現在物に注加し、改造後は凡そ百ベットを目標としてゐる。隔離病棟は南北に長く外廊に

ものの見方を生命ある人間の生命を追求する社會科學の實踐を目指して進んで來つたものであるならばその一分科たる醫學の中に本來人間否定的なものを含んで居るのに何らの不思議もない。醫學が科學である限り醫學者はあくまでも事物を客觀的に冷靜に正しく追求しなければならぬ。科學的精神は本來非情のものである事を知らねばならぬ。問題は醫學の實驗に常つてその働く場が生命を有する有情の人間であり又社會である處に生ずる。ヒューマニスチックであるとは事は此の本來非情の科學的精神をもつてして生命ある有情の人間を追求せんとする時必然生ずる種々の矛盾を調整する爲の方法を考へねばならぬ。人間の